

西独通信

ヤスパーズ哲学研究の現況

——一九八〇年代西ドイツにおける——

寺西三千子

一九八〇年代半ばの西ドイツにおける哲学では、十九世紀後半以来の実証主義に替わって第二次世界大戦以来隆盛になっていく科学論 (Wissenschaftstheorie), 及び、一九六〇年代に生じた実践哲学の復権 (Rehabilitierung der praktischen Philosophie) の問題が、依然として中心的位置を占め、それについての批判的合理主義、批判理論、解釈学、現象学、構成主義、現代的超越論的哲学、等々といった諸立場からの研究、並びに英語圏の分析哲学を導入しての研究が、活況を呈している。これら現代哲学の主潮流内では、実存哲学は、Heidegger 哲学の強大な影響力を別にすれば、もはやその有効性を持たされてはいない。

以下は、今回、西ドイツにおける Jaspers 哲学研究の現状についての情報を求められたのに応ずるべく、上記のような現代哲学の動向下で Jaspers 哲学がどのように研究され得ているのか、限られた枚数内で素描を試みようとするものである。

1. 'dunkel' な Jaspers 哲学と Jaspers 研究の低迷

「Jaspers 哲学は dunkel である。」と、こちらの現役哲学教授

達は断言する。「schwebend」とは、Jaspers 自身が自らの実存哲学や包括者論に与えている表現であるが、その他類似的に、Jargon der Eigentlichkeit, mystisches Dunkel, Dämmerwort vom Umgreifenden, vernebelt, Reizworte, dunkle Metapher 等々の表現が、Jaspers の実存哲学全体、ないしは、実存、包括者、超越者、暗号、実存開明、哲学的信仰等の、Jaspers 哲学の中で基本的位置を占める用語に対して、他の哲学者達や研究者達によって従来浴びせられて来た。

そもそも、すでに従来より、Jaspers は、ドイツの二大実存哲学者の一人として Heidegger と並び称され著作総数も多いにもかかわらずドイツの哲学・思想界であまり重視されず大きな影響力も持っていないという事実が、しばしば指摘されて来た。⁽¹⁾そして、その原因として、例えば、哲学界に直接の後継者層がほとんど存在しない点や、一九四八年のスイスへの移住がドイツを見捨てての逃亡とドイツ人達に受け取られたという点、政治的国家のみならず広くドイツ語文化圏が真のドイツであるとする見解や、東西ドイツの分裂問題に関して再統一に反対するという政治・時事問題的発言が、ドイツ人一般に受け入れがたいものであった点、等が挙げられて来た。が、他方、前記のような Jaspers 哲学の内容そのものが与える Dunkel という印象も、原因の一つとして、見逃してはならないであろう。

このような Jaspers 哲学の印象や立場、見解等に原因しているとなみなされうる従来の negativ な Jaspers 観・Jaspers 像の定着や、冒頭で触れた現代哲学の大勢とも相まって、今日、Jaspers 哲学を主題として取り扱う論著の数はきわめて少ないのであり、ここ数年

間に、若干の研究書・論文、並びに入門的内容の本が新たに付け加わった程度にすぎない。⁽²⁾ しかも、従来の研究（日本での研究も含めて）に比して新たなあるいは卓越した観点や内容がそれらの中に呈示されているとみなすことは、きわめてむづかしい。

西ドイツの諸大学の講義や演習でも、そのテーマに関する参考文献の中に Jaspers の著作名があげられたりすることはあるが、Jaspers 哲学そのものが直接のテーマとして選ばれることは、きわめて少ない。

以上のような傾向下にあつて、わずかな例外は、一九八三年の、Jaspers 生誕百年にちなんでの諸動向であろう。爾来すでに三年の年月を経た今日、その話題性の価値はかなりうすれているであろうが、当時日本にも伝えられた内容と重複しない範囲内で、今一度、マスコミの反響、記念の催しのテーマ、大学の開講題目等から、Jaspers の扱われ方の特質を以下で浮きぼりにしてみたい。⁽³⁾

二、倫理・政治思想的意義

Jaspers 生誕百年にあたる一九八三年二月二三日を前にして、西ドイツの各新聞、テレビなどのマスコミは、「実存哲学者 Jaspers」を大々的に取りあげた。生前の一九五〇年代・六〇年代に西ドイツのマスコミに登場した Jaspers の具体的な政治的発言⁽⁴⁾は、当時大反響をよび、保守的紙面等では、するどい批判のまとなった。

一九八三年のマスコミでの扱い方は、もちろんもはやそのような性質のものではなく、大部分は、人物伝記、著作紹介、思想についての若干の解説、を織りまぜた一般人向けのごく平凡な「Jaspers 入門」的内容であつたが、中には、「Die Zeit」紙のように、Jaspers

の後期の論著、特に政治思想・政治的発言に焦点をしばって、政治文筆家としての Jaspers を評価したものもあつた。西ドイツや世界の政治・社会状況の現状とそのゆくえを Jaspers がするどく分析し今日現実となっている事態を当時すでに正確に予測し予言・警告していたと高く評価しているのは興味深い。

また、この年は、ヨーロッパの、例えば、Oldenburg, Heidelberg, Basel, Rotterdam, Saarbrücken, Wuppertal, Halle - Wittenberg 等の各大学や、London と Zagreb の Goethe-Institut 等で、Jaspers 生誕一〇〇年記念のシンポジウムや会議、講演会、諸資料の展示等が催された。その祭、Heidelberg では、二〇〇以上の資料の展示ともなつて、J.F. Leonhard (Hg.), Karl Jaspers in seiner Heidelberger Zeit (Heidelberg, 1983) という資料集が出版された。その中には初公開の資料がかなり含まれている。⁽⁵⁾

それら上記各地での成果は、現在までのところ以下のように刊行されている。

Lengert, Rudolf (Hrsg.): Philosophie der Freiheit. Karl Jaspers. 23. Februar 1883 - 26. Februar 1969. (Karl Jaspers-Symposium anläßl. d. 100 Geburtstags). Oldenburg 1983.

これは、Jaspers の生地 Oldenburg の市と大学の共催で行なわれたシンポジウムでの次のような講演を中心にして、まとめたものである。

KARL-JASPERS-SYMPOSION

anläßlich des 100. Geburtstages des Philosophen und Ehrenbürgers
der Stadt Oldenburg
veranstaltet von der Stadt Oldenburg (Oldb) und der

Universität Oldenburg

Vortagsreihe:

20. Januar Professor Dr. Rudolf Lengert
„Die Gefährdung der Freiheit durch die empirischen Wissenschaften“
27. Januar Professor Dr. Günther Roth
„Philosophischer Glaube und Offenbarungsglaube bei Karl Jaspers“
3. Februar Dr. Hans Saner, Basel
„Jaspers' Idee einer kommenden Weltphilosophie“
10. Februar Professor Dr. Wolfgang Rudzio
„Gefährdungen der Freiheit – Karl Jaspers als politischer Schriftsteller“
17. Februar Professor Dr. Peter Gottwald
„Jaspers' Weg von der Psychiatrie zur Philosophie. Was bedeutet er für die Psychiatrie heute? “
27. Februar Professor Dr. Jeanne Hersch, Genf
„Untrennbarkeit von Vernunft und Existenz“

Inhaltsverzeichnis

- Einleitung
GERHARD KNAUSS
Karl Jaspers: Philosophie wider die Politik
ALEXANDER SCHWAN
Die Zusammengehörigkeit von existentieller und politischer Freiheit bei Karl Jaspers
STANISLAW TYROWICZ
Gefahren und Chancen der Demokratie aus der Sicht von Karl Jaspers
HANS SANER
Die Kampfmittel des Bürgers in einer Demokratie
FRITZ BÖVERSEN
Friedensbegriff und Friedenserzielung bei Karl Jaspers
Verzeichnis der Abkürzungen
Autorenspiegel

また、右記刊行物には、その他に寄稿等が収められてゐる。

Böversen, Fritz (Hrsg.): Philosophie der Politik. Ein Symposium zum 100. Geburtstag von Karl Jaspers. Wuppertal 1984. (In: Schriftenreihe des Fachbereichs Erziehungswissenschaften der Bergischen Universität-Gesamthochschule Wuppertal. Nr. 12.)

Gerlach, Hans-Martin/Mocek, Sabine: Karl Jaspers, Eine marxistisch-leninistische Auseinandersetzung mit Jaspers' philosophischem, politischem und medizinischem Werk. Halle (Saale) 1984. (Kongress- und Tagungsberichte der Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg. Wissenschaftliche Beiträge 1984/7, A 68).

INHALT

Vorbemerkung der Herausgeber

I

HANS-MARTIN GERLACH

Sechs Thesen über das Thema Jaspers als Philosoph – und wie
werten wir ihn heute?

GÜNTER SCHENK

Jaspers' Konzeption einer „Philosophischen Logik“

HANS-JÜRGEN SCHREIBER

Einige Bemerkungen zur kritischen Analyse des Ethikverständnisses
der Jaspersschen Existenzphilosophie

REINHARD MOCEK

Karl Jaspers' Wissenschaftsbegriff. Anmerkungen zum kulturge-
schichtlichen Anspruch der Differenzierung von Philosophie und
Wissenschaft

HERBERT MAHR

Zur Verankerung existentialistischer Erziehungskonzeptionen im
Menschenbild Jaspers'

UTA EICHLER

Karl Jaspers' Existenzphilosophie – mit oder ohne Kierkegaard
ARNOLD SCHÖLZEL

Die Philosophie von Karl Jaspers im Spiegel der „Zeitschrift für
Sozialforschung“

BERNHARD MALEK

Karl Jaspers', „Philosophie“ in der „kritischen“ Interpretation
Herbert Marcuses

II

FRIEDRICH TOMBERG

Zur Aktualität des politischen Denkens von Karl Jaspers

LUDWIG ELM

Karl Jaspers und die antifaschistische Verantwortung der Intelligenz
VINCENT von WROBLEWSKY

Karl Jaspers – politischer Gedanken eines bürgerlichen Philosophen
in Sorge um die Zukunft des Menschen

ERNST WOIT

Karl Jaspers über Krieg und Frieden in unserer Zeit

HEIGA PETZOLDT

Zu Jaspers' Auffassungen über moderne Technik

ACHIM TOEPEL

Das Problem Individuum – Masee in der Massensoziologie und
Existenzphilosophie/Riesmann – Jaspers – ein Vergleich

HORST KRAMER

Karl Jaspers und Max Weber

III

ACHIM THOM und KLAUS WEISE

Der Beitrag von Karl Jaspers zur Entwicklung der Psychiatrie

BURKHARD GÄBLER

Die Grundzüge der Psychopathologie von Karl Jaspers

一九八三年は Marx 生誕一六五年、没後一〇〇年とすう、DDR
(東独) にとってはまさに意味の大きい年であったが、同年に生誕
一〇〇年の Jaspers も大きく取りあげられ意義づけられたのは、注

目に値する。主たる参加者は、Halle-Wittenberg, Leipzig, Jena, Dresden, Ost-Berlin の各大学教授陣で、当然のことながら、マルクス・レーニン主義の立場から、「ドイツ実存哲学の創始者」、「精神病理学者」、「政治に関与している思想家」、「市民的時代批判家」(上掲書 S. 3) Jaspers を取り扱っているが、従来の型どおりの批判的・否定的取り扱いから抜け出て、七〇年代から除々に見られるような批判と評価の両面的とらえ方になっており、友好的な姿勢がみられる。

再び目を西ドイツに戻すと、大学の講義や演習では、例えば、*„Verantwortung im Wandel der Zeit. Einübung in geistiges Handeln.“* Jaspers, Buber, C.F.v. Weizsäcker, Guardini, Heidegger (“Mainz 1967”) の著者 R. Wisser (Mainz) が次のようなテーマで Jaspers を扱った。(Mainz 大学開講目録に依る)

Grundprobleme der Philosophie von Karl Jaspers (WS 1980/81)
Karl Jaspers (1883 – 1983), *„Die Philosophie soll nicht abdanken“* (WS 1982/83)

Karl Jaspers: *Chiffren der Transzendenz* (WS 1982/83)

Karl Jaspers: *Notizen zu Martin Heidegger* (WS 1982/83)

また、Wisser は、Inter-University Centre of postgraduate studies in Dubrovnik (ユーゴスラヴィア) で、*„Karl Jaspers und die Grossen Philosophen. Aneignung und Unterscheidung — Zum 100. Geburtstag von Karl Jaspers“* というゼミナールを担当した。

かつて、*„Kierkegaards existenziale Ethik“* (Frankfurt 1968) や *„Existenzphilosophie und Ethik“* (Frankfurt 1970) 等の著作で主体としての実存についての倫理の問題を詳細に取り扱った H.

Fahrenbach (Tübingen) は、次のような演習のテーマのもとで Jaspers をもとに扱っている。

Existenzphilosophie, Ethik und Politik (insbesondere bei Jaspers und Sartre) (WS 1981/82)

Existenzphilosophie und marxistische Theorie in der Weimarer Zeit (WS 1982/83)

その中で、Heidegger, Jaspers, Marcuse, Bloch, Sartre が扱われた。Marxismus und Philosophie nach dem Nationalsozialismus (Der Streit um Recht und Grenzen utopischen Denkens) — Lukacs, Bloch, Adorno — Sartre, Jaspers — Popper (SS 1983)
Philosophie — Weltanschauung — Wissenschaft in der Weimarer Zeit (SS 1984) 前期に Dilthey と Husserl が扱われたのに続いて、Weber, Scheler, Jaspers, Heidegger がとりあげられた。

生誕一〇〇年記念 Tübingen — Vortrag: „Karl Jaspers — Ein Philosoph unserer Zeit“ にあづいて、Fahrenbach は、このわけ科
学と哲学との関係、哲学と政治との交錯、に関する Jaspers の思想に今日の意義を見とることによって、Jaspers 哲学をわれわれの時代の哲学として、そして哲学的理性の世界を時事的な問題へと取りもどす思惟として、描き出した。

以上のように、各シンポジウム⁽⁶⁾では、大別して、精神病理学、哲学、政治思想の三側面からのアプローチによって Jaspers の多面な全体像を評価しようとしている。そのうち哲学の分野では、科学と哲学、政治と哲学、自由、哲学的信仰、実存と理性、哲学的根本知、等、オーソドックスに Jaspers 哲学の中心的・特徴的概念や思惟をとりあげて Jaspers 哲学の多様性を示している。しかし、それ

を例えば「自由の哲学」といった表題のもとに総括している点や、Wuppertalのようにテーマを政治哲学のみにしぼっている点、が特徴的である。大学のゼミのテーマにも、各シンポジウムとほぼ同様の傾向が見てとれる。

さて、ここで、マスコミ、シンポジウム、大学での演習や講義での Jaspers を扱う目的や方法、内容的重点の置き方等を、当然のことながら、全く同質視することは出来ないが、それら全体に共通して置かれている重点を見てとれることは可能であろう。それは、Jaspers が精神病理学者であった時期を別とすれば、実存哲学者 Jaspers を、政治と哲学の不可分性が前面におし出されている後期を中心にしてとらえ、彼の倫理・政治思想に意義を見い出そうとしている点である。すなわち、具体的には、Jaspers の時代分析、マルクス主義批判、全体主義批判、時代の危機意識、科学の限界、世界の政治情勢、ドイツ民主主義の現状や具体的な社会・政治問題、自由、責任、平和、等々、倫理・政治的諸問題に関する Jaspers の思想が取り扱われている点である。⁽⁷⁾ 一九八三年、ないしはその前後のテーマとしてそれが共通して取りあげられているのは、それが一九三〇年代前後から一九六〇年代までの状況下での Jaspers の哲学思想（とりわけ一九三三年以降）の中で重要な位置を占めていたテーマであったからのみならず、今日の西ドイツの政治的社会的現状と立場、世界状況にとって、ますます重要な現実問題でもあるからである。それらにとって、Jaspers の思想は、今日もなお意義ある手掛かりの一つとして取り扱われうるのである。

以上、Jaspers の倫理・政治的思想に今日の問題状況下での意義を見い出す、あるいは、Jaspers の著作を今日の現実から読みなお

してみることをアピールする、という一九八三年前後の動向を概観したのであるが、そこで扱われていたテーマは、いずれも、Jaspers 研究としては決して新しいものではなく、むしろ従来からくり返したりあげられているものであり、内容的にも新しさを欠いている。

その意味で、生誕一〇〇年記念にちなむ動向は、Jaspers 研究そのものの内実に何ら新風を吹きこむことが出来るようなものではない。えなかつたと言えよう。⁽⁸⁾ しかも、その動向も、一九八三年が過去となつた今では、消えていきつつあるのである。Jaspers 哲学全体並びにその研究は、再び閉塞状態へと陥っていると言えよう。

これが、筆者（寺西）の目にとらえた限りでの現状であるが、次に、視野を少しは建設的な方向へと向けて、Jaspers 哲学の今後の可能的意義及び Jaspers 哲学研究の可能的方向について考えてみるべきであろう。

三、「哲学の世界史」・「世界哲学」への道

Jaspers の著作の刊行は、従来のもののペーパーバック化が続けられている。⁽⁹⁾ また、三万枚にのぼる Jaspers 手書きの遺稿が、直接には Saner によって管理されている。すべての手紙類は、Archiv für Deutsche Literatur (Marbach) に納められている。遺稿や書簡の内容の一部は、未公開の段階ですでに Saner 著「Karl Jaspers in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten」(Hamburg, 1970) や Saner, Hans: Zu Karl Jaspers' Nachlaß, Ein vorläufiger Bericht (1969/71). In: Ders. (Hrsg.): Karl Jaspers in der Diskussion. S. 449-463. の中で、断片的引用や概略的解説により明らかにされてもいたが、その後、一九七四年以来、遺稿出版のための作業が、哲学の歴史、

論理学・哲学的・現代史的・伝記的に重要な手紙類、の三企画に限定してすめられ、日本でも周知のように、現在までに、哲学の歴史に関する遺稿から次のものが出版されているが、

Noitzen zu Martin Heidegger. hrsg. v. H. Saner. München/Zürich 1978.

Die großen Philosophen. Nachlaß 1 u. 2. hrsg. v. H. Saner. Unter Mitarbeit von R. Bieler. München/Zürich 1981.

Weltgeschichte der Philosophie. Einleitung. Aus dem Nachlaß. hrsg. v. H. Saner. München/Zürich 1982.

その内容は、いずれも、哲学界ではあまり重視されていない。また、一九八五年十月には、Hannah Arendt との往復書簡集が出版された。⁶⁰⁾ Saner 自身の発表によれば、論理学に関する遺稿、哲学の世界史に関する最終部遺稿、書簡選が今後出版される予定である。

このように、Saner を中心として遺稿出版に関係する人々の偉大な努力のおかげで、今後も遺稿の出版が期待出来、それによって、あるいは Jaspers 哲学の新たな魅力や意義が見い出されうるかもしれない。

それ以外には、冒頭で触れたような現代哲学の視点から Jaspers をとらえなおすという道が考えられよう。

更には、Jaspers に関する従来の西欧的研究姿勢から踏み出て、日本人として哲学することの今後の課題をもみきわめるべきである、ということも強調されてよいであろう。西欧の哲学界が、われわれ日本人に望んでいることは、決して、西洋哲学についての、彼らも驚嘆するほど詳細な知識や解釈研究のみではなく、日本人の哲学・思想なのであり、西欧と日本の各々の歴史・伝統・文化・現実社会を基盤とした上での両者の哲学的対話、哲学的交わりなのである。⁶¹⁾

その点、Jaspers の「哲学の世界史」・「世界哲学」という意味⁶²⁾は、日本ひいては東洋の哲学界と西欧ひいては西洋の哲学界の両方において、もつと積極的に注目されてよいはずであり、注目されるべきでもあろう。そして、まさにそのような人間存在の普遍的交わり可能空間への道の探求に率先して参与していくことが、ほかならぬ Jaspers から哲学することを学び Jaspers を乗り越えて行こうとする日本・東洋および西洋の Jaspers 研究の使命であると言えるのではないであろうか。

(Tübingen, 1985/86 記)

註

- (1) 最近の例としては、Jaspers の元助手であり、遺稿の責任編集者である Hans Saner の一九八〇年九月十六日付 Goslich 宛書簡の一部にも、次のような表現が見られる。「Jaspers は、ドイツの大学で一度も好まれなかった。彼自身弟子を引き寄せたがらなかったため、彼のもとで学んだ大部分の者達は、哲学教授にはならず他の職業についた。……(中略)彼は哲学者ではなかったと、今日ほとんどのドイツの大学教授達は思っている」と私は思う。」(Goslich の Diss. (本稿注(2)に明示) S. 570)
- (2) Kurt Salamun 著 „Karl Jaspers“ (München, 1985) の巻末の文献表に一九八〇年代の新文献が含まれている。そこに挙げられていないものとしては、以下のものがある。

- Schwingl, Georg: Die Wiedergewinnung der Wirklichkeit der Transzendenz im Denken von Karl Jaspers. 1982 Regensburg Diss. 1983
- Goslich, Gabriele: Verschiedene Formen indirekter Kommunika-

- tion. Eine Unterrichtreihe in Auseinandersetzung mit Karl Jaspers' Kommunikationstheorie. 1983 Aachen Diss.
- Rodriguez de la Fuente: Grenzbewußtsein und Transzendenz-erfahrung. e. Studie über d. philosoph. Theologie von Karl Jaspers 1984. Ersch. - Jahr auf d. Haupttitels. 1983 München Diss.
 - Wisser, R.: Aneignung und Unterscheidung. Existenzphilosophie im Kampf um die Existenz der Philosophie. Karl Jaspers und Martin Heidegger, in: Theologie und Philosophie 59 (1984), S. 481-498
 - Ehrlich, L.H. und Wisser, R. (Hrsg.): Karl Jaspers Today. Philosophy at the Threshold of the Future, Washington, 1986
 - Örnek, Yusuf: Karl Jaspers. Philosophie der Freiheit. Freiburg i.Br, München, 1986
 - Wolandt, Gerd: Philosophie und Erfahrungswissenschaften bei Karl Jaspers. In: Philosophisches Jahrbuch (92. Jahrgang 1985, S. 255-265)
- (3) 前記 Salammun 著 „Karl Jaspers“ の第三章「影響」の中でも、九八三年の Jaspers 生誕一〇〇年記念の催し等、最近の研究動向について、よく概略的に触れられている。
- (4) 例えば、東西ドイツ再統一問題や、ドイツ民主主義の危機に関して等また著書『連邦共和国はどこへ行く』（一九六六年、あらかじめ „Der Spiegel“ 誌 18. April 1966 Nr. 17, 25. April 1966 Nr. 18, 2. Mai 1966 Nr. 19 に掲載された。）における問題提起等。
- (5) 余談ながら、資料集には印刷されていないが、展示では、Jaspers の 1928/29 の冬学期の講義「カントの純粹理性批判の聴講者登録名簿に Seinosuke Yuassa (Kobe Japan), Seiro Oe (Mikage Japan) の名が、 Hannah Arendt 等の名とともに記されているのが見られた。
- (6) Basel や Heidelberg での Jaspers-Symposium には、哲学部門で、日本から、鈴木、林田、宮坂、福井の四氏が参加され、その詳しい内容は、その後日本に伝えられたことと思うので、ここでは記述を省略したが、その Symposium をも念頭に入れて、以下論をすすめる。
- (7) Jaspers において、特に彼の後期の哲学において、哲学と政治思想とは不可分である。彼自身、政治的思惟をとまなわなないかなる偉大な哲学も存在しないと確言している。彼の哲学は政治思想を含むものであり、彼の政治的な論議、講演言は、彼の哲学にもとづくものである。また、倫理と政治も不可分であり、Jaspers 自身、倫理—政治的という言葉を使っている。なお、前期において展開された実存を中心とする実存哲学と、外的現実とのかかわりにおける後期の哲学とは、実存の基盤としての現存在の確保という意味で、本質的に連関している。
- (8) Salammun は、Jaspers 生誕一〇〇年記念の諸動向が Jaspers 研究に「新しい衝動を与えたと受けとることが出来る」と積極的に評価している。（Salammun : 前掲書 S. 161）
- (9) 一番最近のものとしては、Karl Jaspers: Der Arzt im technischen Zeitalter - Technik und Medizin · Arzt und Patient · Kritik der Psychotherapie - (München, 一九八六年六月刊) がある。中味は、いずれもすでに公刊されている講演等合計五本を集めたもので、そのうち四本は、„Wahrheit und Bewährung“ (München 1983) にも、おめられている。この書に関しては、『コムニカチオン』（第二号、一九八五年十月）P. 18 で触れた。
- (10) Jaspers とは直接には無関係な情報ではあるが、例えば、大学のゼミで „Heidegger, Aus einem Gespräch (mit einem Japaner) von der Sprache“, がとり扱われ、大きな反響をよんだ。また、今日の京都学派による、日

本哲学と西洋哲学との積極的な対決の試みは、西ドイツ哲学界においてあまねく知られており、つく最近では、日独協同でまとめられた左記の本などが、注目をされている。

D. Henrich (Hg.): All-Einheit. Wege eines Gedankens in Ost und West (Stuttgart, 1985)

- (2) Jaspers は、"Universalgeschichte der Philosophie" という表現ののち、"Welgeschichte der Philosophie" という表現を使うようになったが、それは、来たるべき一つの Weltphilosophie に付属するものであることを示すためであつたろうと推測されている。(遺稿『哲学の世界史序論』(1982) Saner による序、S. 9) 「世界哲学」とは、Jaspers において、現代の必至の要請、不可避の課題として提示されているものである。それは、Saner の前掲書 "Jaspers" (1970) によれば、Jaspers において一義的ではなく、現実世界にかかわる哲学であるとともに、人類の大きな結合における思惟であり、一つの共通の空間における思惟である。すなわち、一体としての人類の、普遍的交わりの空間を可能にしようとする思惟である (S. 104 ~ 105)。なお、Jaspers の世界哲学に関する Saner の詳しい考察は、以下に発表されている。

Saner, Hans: Jaspers' Idee einer kommenden Weltphilosophie. In: R. Lengert (Hrsg.): Philosophie der Freiheit. Oldenburg 1983. S. 49-63.

付記

- Jaspers の生地 Oldenburg の州立図書館の G. Gefken と K.Ku-nert の公務外、私的作業による、世界中の文献を可能な限り集めて
① Jaspers Bibliographie の作成は、その中間稿、Karl Jaspers. Vor-

bereitung zu einer Bibliographie von Gisela Gefken" (Oldenburg, 1965) (A 4 版三一七頁) の後、Karl Jaspers. Eine Bibliographie Bd. 1 Die Primärbibliographie" (Oldenburg, 1978) (三〇一頁) のみが Privatdruck として出版され、現在大部分の図書館で、閲覧可能である。この Bibliographie には Kunert による一般的序論 "Existenzphilosophie-ihre Wesen und ihre Bewährung vor der Kritik" が冒頭に入れられている。同図書館には、Sekundärbibliographie の原稿として、出版年一九六五年までの、Jaspers に関する研究文献の著者名・題目等が、テーマ別、出版年順に番号を付して分類、タイプされて保管されており、閲覧やコピーが可能である。また、それ以降出版の文献は、カード式目録になっている。日本で発表された文献も、届け出た限りにおいて登録されている。かつて中間稿の時点で、そのための一部通信の労をとられた田辺市の細尾登氏(故)の手紙も、事務上の資料の中に保管されており、日本では、まだ一般にはタイプライターやコピー機等の普及していなかった当時の苦労がしのばれる。なお、一九八三年の、同図書館長 A. Dietzel と G. Gefken からの情報によれば、この文献目録作成作業を同図書館の任務とすることは出来なため、一九八二年十二月の Kunert の死去にともない、向後の続行は、Kunert の子息と、Wisser (Mainz) の手にゆだねられるであろうとのことである。

以上のような経緯をふまえて、Saner 著、Karl Jaspers in Selbstzeugnissen und Büddokumenten" (Hamburg 1970) 中の Bibliographie に関する一九七〇年までの段階での記述は、一九八四年版で改訂された。

なお、この州立図書館での文献目録作成に関しては、すでに中間稿当時、日本へは重田英世氏による報告がなされているが、その後詳しい情報はたち消えた感があり、ここに参考までに記した次第である。

第二回大会研究発表 要旨

(1)「ヤスパースの実存における非理性」 古川 正樹

ヤスパースにおいて、「哲学すること」は本来的存在の探究であり、それは本来的存在意識の獲得の努力である。この存在意識は実存の自己実現において獲得される。ところで、可能の実存としての人間は、己れの自由において自己実現に関して全責任を負うにも拘らず、自己実現を随意には為し得ない。実存的自由のこの不如意（不随意）（*Veragen*）においてこの自由が超在（超越者）に関係づけられていることが確認される。このような確認から、実存と理性との関係の問題への一つの展望が開かれる。『理性と実存』（1935）で示された両者の両極性の思想は、理性と非理性との関係という、哲学における古来の問題の定式的表現であり、実存における非理性的なものの追究は、理性の意味と限界との究明のためにも重要である。私は、ヤスパースの理性の本質を、世界内実現への意志として捉え、実存の内に存する非理性を超理性と反理性との二面から、超在への実存の關係の諸特性の考察を通して、追究しようと試みた。（学習院大学大学院博士課程）

(2)「ヤスパースの理性の本質」 福井 一光

一方において、俗に知の帝国主義と論難されるような、肥大化してしまった近代の理性観がある。他方において、この近代的理性観に対抗して、感性や直観、下意識や非合理的体験を重視する一部の生の哲学の系譜がある。前者は、理性を一面的に強調することにおいて、理性によって合理化し得ない根源的非合理性や、理性を越えた超合理的な神の問題を見失い、後者は、非合理的生命性を一面的に強調することにおいて、理性を媒介することによってもたらされる人間の自覚の問題や、種々の生命の連続の流れの中に解消し得ない実存的個別性の問題を取り落してしまっている。

これら二辺を排して、こうした哲学的態度を批判し、人間と世界及び人間と神との新たな関係を発見する機能を、筆者は、ヤスパースのいう“本来の理性”（*die eigentliche Vernunft*）の性質に見ようとするものである。またそこに、現代哲学史上無視することの出来ない、ヤスパースの哲学的視点の先駆性を認めようとするものである。しかも、ヤスパースは、理性の本来の機能を考察することの中で、『哲学』（三巻）に見られる超越者論とは異なる包括者論を展開し始める。それは、ヤスパースが理性の問題の下に、包括者の問題を真に考えざるを得なくなった、或は逆に包括者の問題と共に、真に実存と協働する理性を考えざるを得なかったということに興味しているように思う。

それでは、ヤスパースのいう本来の理性とは、一体如何なる性質と機能をもったものであるのか、また彼のいう包括者とは、一体如何なる世界を指示するものであるのか、こうしたことをドイツ観念論とその後の精神思潮を振り返ることを通して掴まえることが、今回の発表の目的である。（玉川大学助教授）